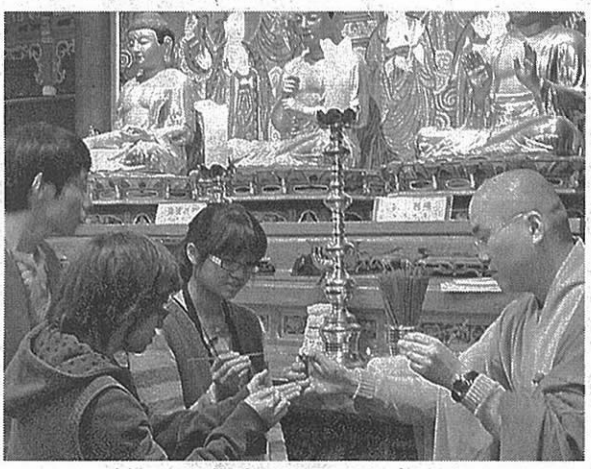
世界 いまを刻む

不安癒やす〝駆け込み寺〟

寺院に宿泊 修行体験 韓国テンプルステイ

海外からも参加者急増 失業問題、人気の背景に

韓国で寺院に宿泊し仏教の修行を体験する「テンプルステイ」が人気を集めている。異文化体験を求める外国人だけでなく、韓国人の参加者も4年間で3倍に急増した。就職難などで若年層を中心に孤独や将来への不安を感じる人が増えていることが背景にあるようだ。信者数の頭打ちに悩む仏教団体も、宿泊可能な寺を増やしたり様々な体験イベントを企画するなど普及に努めている。



僧侶から作法を習うテンプルステイの参加者（ソウルの金仙寺）

「離婚もしたし、今まで苦労ばかりだった」。中学校教師の女性（45）が悩みや心情を吐露すると、他の参加者は真剣に聞き入った。住持（住職）は一つ一つ問いに答えながら、易しい言葉で修行の効用を説いた。

週末に都心離れ

ソウル中心部からバスで約20分。北漢山（プッカンサン）の険しい登山道を5分ほど登ると、金仙寺（クムソンサ）の入り口「一柱門」が見えてくる。空気は澄んで静まりかえり、都心とは別世界だ。

11月の週末、同寺が実施した1泊2日ステイには17人が参加した。集合は午後2時半。作務衣（さむえ）に着替えて基礎的な仏教の知識や作法の説明を受ける。夕食後は念仏を唱える「礼仏」や座禅を体験。翌朝は午前5時に木魚の音で目を覚まし、礼仏や108回繰り返し拝む「108拝」、座禅をこなす。清掃や茶を飲みながらの座談、映画観賞などを終え、昼食後の午後1時に解散する。

住持の法眼（ポプアン）師は「仏教は修行が基本」と強調するが、とにかく規則が多い。「鉢盂供養」という精進料理の食事は、膳を置く位置や、ご飯のつぎ方など厳格な決まりがある。食べ残しは厳禁、食後は膳にお湯を注ぎタクアンで汚れをふき取り、タクアンも食べる徹底ぶりだ。

108拝は汗が噴き出るほどきつい。礼仏も座布団の持ち方や合掌の仕方、お辞儀の角度まで指導する。ただ、由来や意味を丁寧に教え、強制はしない。僧侶は何度も「途中でやめてもいいです」と声をかける。

韓国寺院の大半を統括する仏教団体「大韓仏教曹溪宗」によると本格的にステイを開始したのは2004年。36カ所で実施し韓国人約3万3000人、外国人約3000人が参加した。08年には87カ所に拡大し、韓国人は約2・8倍の約9万2000人、外国人も合わせると約3倍の約11万2000人に急増した。

キリスト教徒も

ステイを企画する韓国仏教文化事業団の張ボベ氏は「心の悩みや職場のストレスを持つ人に加え、金融危機以降は経済問題を抱える人が癒やしに来る」と指摘する。近年は貧富の格差拡大や失業問題などが深刻化。凶悪犯罪も増えた。このため「将来に不安を抱える20、30歳代の女性が独りで参加する」（法眼師）ケースが多く、キリスト教徒も目立つという。

ステイは布教につながり、1泊3万～7万ウォン（約2300～約5400円）の宿泊費収入は寺側にも魅力的だ。財閥企業や金融機関などの社員研修、受験生や失業者などを対象とした特別イベントも企画。参加者が減る冬季は雪山トレッキングやソリ体験を行事に加えるなど知恵を絞り、毎週通う「ステイマニア」も少なくない。

「きつかったけど来てよかった」。1泊2日の修行を終えると一体感も生まれる。参加者は記念写真を撮り合い、雨上がりの寺を後にした。

（ソウル＝山口真典）